

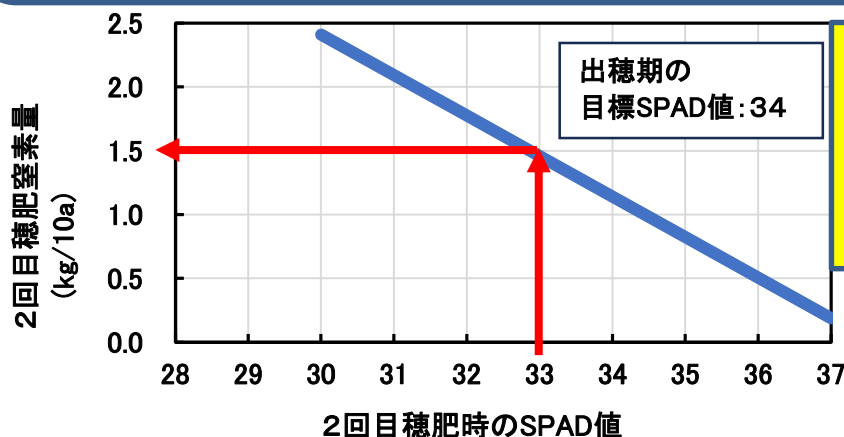
適切な穂肥と水管理で後期栄養の確保を！！

1 品質向上に向けた後期栄養の確保

7月23日現在のコシヒカリは、草丈が長く、葉色が濃い状況で今後も高温気象が続くと予報されています。そのため、適切な追加の穂肥を施用して後期栄養を確保し、品質・収量の向上を目指しましょう。

◆（分施栽培）コシヒカリ2回目の穂肥について

- コシヒカリの1回目穂肥を施用しなかった場合でも、**2回目の穂肥は確実に施用しましょう。**
- * 2回目の穂肥施用時の葉色（SPAD 値）と出穂期の目標葉色（SPAD 値 34）から2回目穂肥の施用量（窒素成分）が判断できます。（下図参照）



* 出穂期の目標 SPAD 値 34 で、2 回目穂肥時の SPAD 値が 33 の場合、
→ 2 回目穂肥の窒素量は、**1.5kg/10a**

【図 コシヒカリ2回目穂肥量のめやす(分施栽培)】

◆ コシヒカリの追加穂肥について

- 分施栽培で2回目の穂肥を施用した後も葉色が回復しない場合や、全量基肥施肥栽培で葉色が低下している場合は、**追加の穂肥を行いましょう。**（下表は、化学肥料使用の場合）

区分	判断時期、葉色のめやす	施用時期	施用量 (窒素成分 kg/10a)
分施	出穂期6日～3日前にSPAD値31以下の場合	出穂期3日前まで	1kg
全量基肥	出穂期までのSPAD値が33を下回る場合(または下回ると予想された場合)	出穂期10日前まで	1kg

～用水は限りある資源です。掛け流しは絶対に行わず、地域全体で大切に使いましょう～

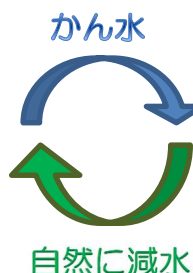
2 飽水管理の継続と緊急時の水管理

○ 出穂 25 日後まで飽水管理を継続しましょう。

【飽水管理の実際】



ほ場に 2～3 cm 水をためて、足跡や溝に水がなくなったらかん水する管理です！



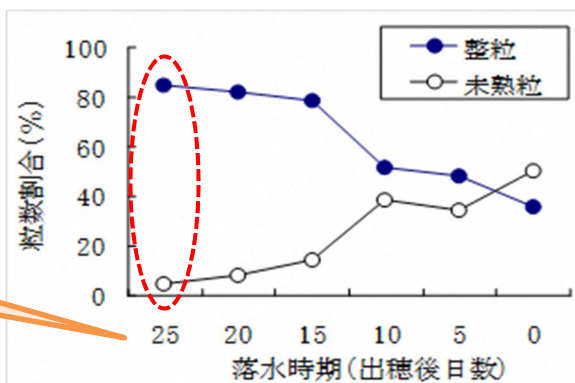
水分補給と
酸素供給、
両方大切。



○ 登熟初中期は米粒へのデンプンの蓄積が盛んな時期です。早期に落水すると玄米品質に大きな影響を及ぼすので、早期落水はやめましょう。

○ 完全落水のめやすは、米粒へのデンプン蓄積が 7 割以上となる出穂期 30 日後です。

落水時期が遅いほど
(飽水管理期間が長いほど)
未熟粒が減り、整粒歩合が上がります。



3 カメムシ類・穂いもち防除を徹底しましょう

(1) カメムシ類の防除

○ 8 月が高温で推移すると、早生品種を中心に割れ粳が多く発生し、カメムシ類による斑点米の被害が多く発生します。

被害を抑えるため、農道・畦畔の草刈りの継続と薬剤防除を徹底しましょう。

○ 早生では 2 回防除、コシヒカリでも 1 回防除（多発生が懸念される場合は 2 回）を確実に実施しましょう。

カメムシ類の防除（2 回防除の場合）

回数	めやす	カメムシ成長段階
1 回目	出穂期 3～7 日後頃	成虫が本田侵入
2 回目	1 回目の 7～10 日後	卵がふ化し終わった頃



近年発生の多い
アカスジカスミカメ
体長約 4～5 mm

(2) いもち病

○ 各地で葉いもちの発生が確認されています。

早生品種では、出穂期に合わせた個人防除や共同（一斉）防除を確実にを行い、穂いもちの発生を防ぎましょう。

○ 特に、新之助などいもち病に弱い品種では、葉いもちの発生がないかほ場を確認し、発生が確認された場合は、直ちに薬剤防除を行いましょう。

収穫前に事前準備を入念に行い、 高温に対応した適期収穫を！

○品種毎の出穂期・成熟期や天候の推移を見極めながら早めに作業計画を立てましょう。

【品種別の出穂期と積算平均気温による収穫適期のめやす（7月23日現在）】

品 種 名	出穂期	飽水管理終了 (出穂期 25 日後)	収穫適期のめやす
ゆきみらい	7 月 15 日	8 月 9 日	8 月 21 日 (975℃)
新 潟 次 郎	7 月 19 日	8 月 13 日	8 月 27 日 (1,000℃)
ゆきん子舞	7 月 20 日	8 月 14 日	8 月 26 日 (950℃)
五 百 万 石	7 月 18 日	8 月 12 日	8 月 25 日 (975℃)
こしいぶき	7 月 23 日	8 月 17 日	8 月 31 日 (975℃)

※出穂期は村上地域の平均的な出穂期としています。7月22日までは本年値、以降は平年値で積算。
(村上アメダス)

○ 積算気温によるめやす（上表）を参考に必ずほ場で籾の黄化程度を確認し、収穫適期を判断しましょう。籾黄化割合 85～90%が収穫適期です。茎葉や穂軸の色は品種や栽培条件等によって変わるので、必ず籾の色で判断しましょう。

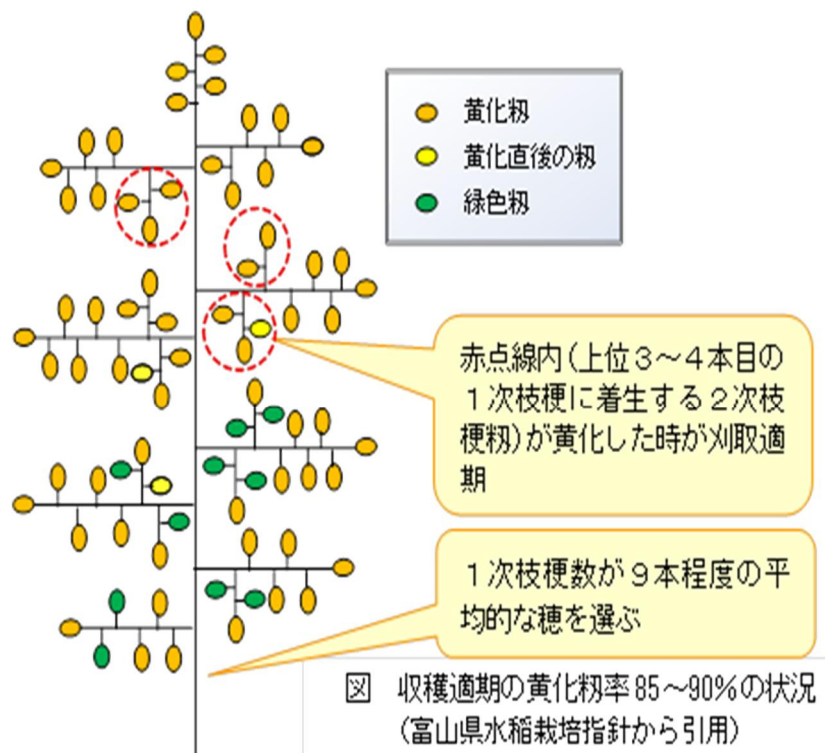
○ 高温登熟(出穂期 5～24 日後の 20 日間の平均気温が概ね 26℃を超える場合)になると品質低下が進みやすいので、上記の目安より 50℃（2 日程度）収穫開始を早めて刈り遅れないようにしましょう。

【籾の黄化程度から、収穫適期を判定する方法】

高温登熟年の収穫判断

※出穂後 0～19 日間の日平均気温が 27℃以上の場合や、登熟後半が高温条件になる場合は、**立毛胴割れ**の多発生が、出穂後 5～24 日間の日平均気温が 26℃以上の場合には**基部未熟粒**の多発生が懸念されます。

この場合、収穫適期めやすより **2 日（積算温度で 50℃）程度早く** 刈り取りましょう。



収穫適期予想などの技術情報は、8月上旬頃から村上地域振興局農林振興部のホームページに掲載します。
(https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/murakami_norin/20260706murakamihukyuusenta-2.html)



4 適正な乾燥で食味・品質を落とさないように！

- 乾燥機の送風温度が高いと胴割れや食味の低下につながります。適正な乾燥温度は、初期水分 24%で 50℃以下、初期水分 28%で 40℃以下です。
- フェーン等により初期水分が 20%未満となった低水分粳では、乾燥速度を毎時 0.5%以下にして乾燥しましょう。
また、乾燥時の水分ムラの解消に、乾燥機の 2 段乾燥機能などを活用し、目標水分(15%)に仕上げましょう。

5 丁寧な調製で整粒歩合を上げ、1 等米に仕上げましょう！

- 粳すり
 - ・機械の点検・掃除を徹底し、「もみ混入」など人為的ミスによる品質低下を防ぎましょう。
 - ・肌ずれ防止のため、粳すりは、乾燥終了後粳の温度が常温近くまで下がり水分が均一になってから行いましょう。
 - ・粳混入を防止するため、脱ぶ状況をよく確認し、混入がないよう調整し米選機に流しましょう。
- 米 選
 - ・1.85mm 以上のふるい目を用い、流量を適正にして、未熟粒やくず米を除去しましょう（大粒の品種では違うふるい目基準があるので注意しましょう）。
 - ・色彩選別機を活用して高品質米に仕上げましょう。

高温下の作業事故に注意しましょう

- ・高温下での作業は集中力が低下し作業事故につながる危険があります。適宜休憩をとって安全確保に努めましょう。
- ・刈り取った粳は熱を持つので、早めに乾燥機に投入し品質低下を防ぎましょう。
- ・その他の収穫対策については、普及センターやJAにご相談ください。



* 電子メールで技術情報の配信を希望される方は、左記 QR コードから本文に住所・氏名・電話番号を記載し送信下さい。
(お伺いした個人情報、他の目的には使用いたしません)